

Title	現代フランス語における動詞時称体系についての一考察
Sub Title	La représentation du temps dans la longue française
Author	日高, 桂(Hidaka, Yoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.186(107)- 202(91)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0202

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代フランス語における動詞 時称体系についての一考察

日 高 佳

1. 動詞の時称体系を考える時、我々は、まず従来の方法にしたがつて論理的な時の体系を思い出す。しかし、言語の持つ時の体系と論理的時の体系とは同一のものではないので、後者をもつて前者の体系構造を解明しようとする事は不可能である。ただ、言語は人間の精神活動の所産であり、心理学や論理学と密接な関係を持つていることは当然であつて、この面を全く無視する事は出来ない。

動詞の時称体系は各言語によつて異つている。各言語間に共通している事は現在形の単一性のみだと云われている。この様な各言語における動詞時称体系の多様性は、何に由来しているのであろうか。⁽¹⁾偶然性によるものか、又動詞の時称体系の構造上の進化によるものか、これらの他の理由によるものなのであろうか。

我々は、時称を考える時、通常、無限にのびる一本の線を考え、延長線上に未来と過去をおき、その両者にはさまれる部分を現在と考える。そして、これは理論的な時と一致している。しかし、時称体系は、この様な一本の線上におさまり切るものではない。一本の線を考えるこの方法は、決して間違つたものではないが、しかし、これは時についての全景を余りに高度に抽象化し、完成しすぎてしまつているため、更に深く認識を深めようとする時、不適當になつてしまつるのである。⁽²⁾

註(1) G. Guillaume Temps et Verbe Paris, 1965. Guillaume は、le présent の単一性をはっきり指摘している。

註(2) ≪この図式は、人間精神が作り出した最も重要なものである。抽象化によつてしかその存在を獲得しえぬもの、提示しえぬものを出来るだけ具体的な image で表わそうとする努力の結果生み出されたものである。しかし、こ

人間の精神は、その内部に **image** を形成する時、ある時間を必要とする。その時間は、たとえ、どんなに短いものであろうと、実在する時間であり、一本の直線で示される軸を形成する。人間の思考作用は、この軸の上で展開され、それがこの軸上のどこで時を現実化するか、即ち、動詞を現実化するかによつて、動詞の形態、動詞の時の秩序、即ち、動詞の時称体系が構成される。それ故、この時の現実化のしかたの多様性によって、論理的な時の体系とは別に各言語に様々の時称体系が構成されて来ると考えられる。

2. さて、フランス語の動詞の時称体系は、どうなっているであろうか。まず、具体的に一冊のテキストを選び、そこに動詞の各時称形式が、どの様に現われて来るかを調べてみよう。この分析にあたっては、各時称形式から時を表わすものとしての概念をはずし、単なる **forme** として、それがテキストの中にどの様な相互関係を持つて現われるかを調べて行きたい。

非依存節、依存節に分け、各時称形式の現われ方を調査すると次の様になる。

の図式は、**Image du temps** であり、或る対象を深く認識しようとする時には、その対象を完成した状態で考えては、十分でない。≫ G. Guillaume, **Temps et Verbe** p.8.

註(3) G. Guillaume は、この軸を **l'axe du temps chronogénétique** と呼び、この軸上に展開されていく思考作用を、**la chronogénèse** と云っている。

註(4) Guillaume は、この **temps chronogénétique** を横軸とし、この軸に交わる三つの縦軸、

(i) **temps in posse (en puissance)**,

(ii) **temps in fieri (en devenir)**,

(iii) **temps in esse (en réalité)**, を考え、思考作用は、まず、横軸の上を動きながら、次に三つのうち、いずれかの縦軸をとり、時を現実化するものと考えている。

註(5) J.-P. Sartre: *Le Mur*. (Gallimard, N° d' Ed 7999), この短篇集には、**Le Mur, La Chambre, Erostrate, L'Intimité, L'Enfance d'un chef** の五篇が入っている。

註(6) フランス語研究, N°25~N°26, 1960. 大阪市大, 森本英夫先生の「フランス語の動詞時称体系について」の方法を借用している。

表 I

	Proposition Indépendante			Proposition Dépendante			TOTAL
	Récit	Discours	Total	Récit	Discours	Total	
1 savez	357	1571	1928	185	479	664	2592
1' avez su	109	265	374	28	81	109	483
2 saviez	2310	143	2453	779	113	892	3345
2' aviez su	313	13	326	137	17	154	480
3 sûtes	2439	33	2472	84	3	87	2559
3' eûtes su	4	0	4	23	0	23	27
4 saurez	39	142	181	11	33	44	225
4' aurez su	19	7	26	2	3	5	31
5 sachiez	2	1	3	34	71	105	108
5' ayez su	0	0	0	3	5	8	8
6 sussiez	0	0	0	58	4	62	62
6' eussiez su	2	0	2	3	0	3	5
7 sauriez	143	112	255	65	34	99	354
7' auriez su	82	22	104	12	8	20	124
8 sachez	0	162	162	0	0	0	162
somme	5820	2471	8291	1427	851	2278	10569

表 I によつて、頻度数の高いものから並べてみると、

表 II

1 saviez	31.7%	9 auriez su	1.1%
2 savez	24.5%	10 sachiez	1.0%
3 sûtes	24.2%	11 sussiez	0.5%
4 avez su	4.6%	12 aurez su	0.3%
5 aviez su	4.5%	13 eûtes su	0.2%
6 sauriez	3.3%	14 ayez su	0.07%
7 saurez	2.1%	15 eussiez su	0.03%
8 sachez	1.5%		

saviez, savez, sîtes の三形式が最も多く現われ、全体の80%を占め、aviez su, avez su がほぼ同率で続いている。これを古代フランス語に於ける調査と比較してみると、古代フランス語では savez が 43%で最も多く、以下、sîtes, avez su, saviez,となつている。この調査では、saviez が最も高率を示しているが、これを現代フランス語の特徴ということは出来ない。Le Mur には、五篇の短篇が収められており、小説によって savez が第一位を占めるものもあるからである。ただ、五篇に共通している事は saviez, savez, sîtes, が順位の差こそあれ、第一位から第三位までを占め、総数に対する比率は、約80%を示すことである。古代フランス語においては、saviez と avez su の頻度率の差は、0.7%から3%であったが、Le Mur においては、表Ⅱによれば、27.2%、各篇別にみても、その比率の差は、20%から30%とかなり大きい。また一般に複合形より単純形の方が多く現われ、12位以下に複合形が集中している。

次に、表Ⅰにより、非依存節、依存節を分けて、頻度の高いものから並べてみよう。

註(7) 森本英夫先生《Guillaume d' Angleterre における時称体系について》(仏語仏文学研究 No.2. 1963)においては、 savez 43%, sîtes, 15.6%, avez su 8.6%, saviez 5.9%, 又、《Saviez et Sîtes dans Erec et Enide》(仏語仏文学研究, N° 10, 1967, 森本英夫先生)においては savez 43%, sîtes, 19.4%, saviez 7.7%, avez su 7%となっている。

註(8) Le Mur. Total. 1234. (1) saviez 39.6% (2) sîtes 26.3%, (3) savez 17.2%
 La Chambre. Total. 1625 (1) savez 31.7%, (2) saviez 25.9%, (3) sîtes 22.7%
 Erostrate. Total. 905. (1) saviez 32.4%, (2) savez 24.0%, (3) sîtes 20.4%
 L' Intimité. Total. 2274. (1) savez 38.0%, (2) saviez 20.5%, (3) sîtes 15.0%
 L' Enfance d' un chef. Total. 4513. (1) saviez 37.2% (2) sîtes 29.1%, (3) savez 17.2%

表 III

非 依 存 節		依 存 節	
1. sûtes	29.9%	1. saviez	35.0%
2. saviez	29.5%	2. savez	29.3%
3. savez	23.3%	3. aviez su	6.8%
4. avez su	4.5%	4. sachiez	4.6%
5. aviez su	3.9%	5. avez su	4.4%
6. sauriez	3.07%	6. sauriez	4.3%
7. saurez	2.1%	7. sûtes	3.4%
8. sachez	1.9%	8. sussiez	2.2%
9. auriez su	1.2%	9. saurez	1.9%
10. aurez su	0.3%	10. eûtes su	0.9%
11. eûtes su	0.04%	11. auriez su	0.8%
12. sachiez	0.03%	12. ayez su	0.3%
13. eussiez su	0.029%	13. aurez su	0.2%
14. ayez su	0	14. eussiez su	0.1%
15. sussiez	0	15. sachez	0

非依存節では、sûtes, saviez, savez が、各30%に近い高率を示している。依存節では、saviez が最も高く、次いで、savez が29%を示しているが、sûtes は、わずかに3.4%を示すにすぎない。この事は、sûtes は、非依存節によく使われる時称形式であり、saviez, savez は、そのどちらにもよく使用される事を示している。sachez は、非依存節にのみ、現われるのは当然であるが、ayez su, sussiez が、Le Mur においては、依存節にのみ現われている。sachiez は、依存節においてかなりの高率を示し、sussiez, ayez su, eussiez su も非依存節におけるよりも、10倍に近い比率を示し、これらが、依存節に現われやすい時称形式である事をはっきりと示している。そして、aviez su, eûtes su が、これらと同じ傾向を示す時称形式であり、saviez, savez, sauriez は、非依存節においても、依存節においてもよく現われる時称形式である事がわかる。

今度は、小説の「語りの文」と「会話の文」とに分けて比較してみよう。

表Ⅳ、表Ⅴを見てすぐ気づく事は、Récit の非依存節においては、sûtes, saviez が両者で81.6%を占めて優勢であり、Discours のそれにおいて

表 IV *Récit*

非 依 存 節			依 存 節		
1	sûtes	41.9%	1	saviez	55.0%
2	saviez	39.6%	2	savez	12.0%
3	savez	6.1%	3	aviez su	9.5%
4	aviez su	5.3%	4	sûtes	5.9%
5	aurez su	3.2%	5	sauriez	4.6%
6	sauriez	2.4%	6	sussiez	3.5%
7	avez su	1.8%	7	sachiez	2.4%
8	auriez su	1.4%	8	avez su	1.5%

表 V *Discours*

非 依 存 節			依 存 節		
1	savez	53.6%	1	savez	56 %
2	avez su	10.7%	2	saviez	12.1%
3	sachez	6.5%	3	avez su	8.9%
4	saviez	5.8%	4	sachiez	8.2%
5	saurez	5.7%	5	sauriez	4.0%
6	sauriez	4.5%	6	saurez	3.8%
7	auriez su	0.8%	7	auriez su	0.7%
8	sûtes	0.5%	8	ayez su	0.5%

は、savez, avez su が64.3%を示して有力であるという事である。Récit において、八割を占めた saviez, sûtes は、Discours においては、各々 5.8%, 0.5%で savez, avez su の一割に満たない。Récit には sûtes, saviez が多く好まれ、Discours には、savez, avez su が好まれる事を示している。

次に、依存節を比較してみると、Récit では、saviez が 55.0%、Discours では savez が56.0%の圧倒的高率を示し、非依存節で示された傾向とほぼ一致している。Récit では、以下 savez, aviez su, sûtes が続き、Discours では、saviez, avez su, sachiez が続いている。sachiez は Discours の依存節で avez su とほぼ同じ高い比率を示し、sachiez, sussiez, ayez su, eussiez su の四形式の中では Discours に好まれる形

式である事を示している。一方 *eûtes su* は、27例すべてが *Récit* に現われ、その中22例が依存節にみられ、完全に *Récit* の時称形式である事が示されている。*saviez* は *Discours* の依存節においても12.1%と *savez* について多く現われ、*Discours* に好まれる時称形式である *avez su* よりも高率を示している事は注目に価する。*saviez* は、非依存節・依存節、また、*Récit*, *Discours* の別なくどれにも多く現われる時称形式であり、非常に柔軟性に富んだ時称形式であるという事が出来る。

表 VII

Principal subor donné	1	1'	2	2'	3	3'	4	4'	5	5'	6	6'	7	7'	8	Total
	<i>savez</i>	<i>avez su</i>	<i>saviez</i>	<i>aviez su</i>	<i>sûtes</i>	<i>eûtes su</i>	<i>saurez</i>	<i>aurez su</i>	<i>sachiez</i>	<i>ayez su</i>	<i>sussiez</i>	<i>eussiez su</i>	<i>sauriez</i>	<i>auriez su</i>	<i>sachez</i>	
1 <i>savez</i>	491	13	24	3	4		26						21	2	16	600
1' <i>avez su</i>	51	17	9	1	1		7						4	16	1	107
2 <i>saviez</i>	45	37	422	48	243								26	4	1	826
2' <i>aviez su</i>	8	4	59	9	44								6		2	132
3 <i>sûtes</i>			2	18	7	60										87
3' <i>eûtes su</i>			1			21							1			23
4 <i>saurez</i>	18	2					16								2	38
4' <i>aurez su</i>	1							1								2
5 <i>sachiez</i>	52	1	13				9						20	3	3	101
5' <i>ayez su</i>	4		2		1									1		8
6 <i>sussiez</i>	2	45	1	4									4	6		62
6' <i>eussiez su</i>			3													
7 <i>sauriez</i>	15	5	26	5	21		1						10	2	1	86
7' <i>auriez su</i>	8		6		1								2	2		19
	695	82	627	74	400								94	36	26	2094

3. 2においては、非依存節・依存節に、各々時称形式がどの様に分布しているかを調べたが、3では、その依存節の時称形式が、各々対応する主節の時称形式とどの様な関係にあるかを調べてみよう。表Ⅵの縦は依存節の時称形式を示し、横は主節の時称形式を示すものとする。⁽⁹⁾

表Ⅵは、縦に依存節に来る時称形式を、横に主節に立つ時称形式をとつたが、この表から二つの見方が可能である。即ち、各時称形式の主節に立つ可能性と、その依存節に来る可能性の二つである。たとえば、主節に *savez* ⁽¹⁰⁾ が立ち、依存節に *savez* ⁽¹¹⁾ が来る可能性は 491/695、つまり、70.6%、*avez su* が来る可能性は 51/695、つまり 7.3% である。依存節に *savez* の現われる数は 600、その中、主節に *savez* が立つのは 491、即ち 81.8%、*avez su* が主節に来る率は 13/600、つまり、21% という事になる。今、この様にして、縦からみた関係、横からみた関係を各々百分率であらわし、その相互関係を更に明確化するために、10%以上を「+」、3.3%~9.9%を「neutre」、3.2%以下を「-」として表を作ると表Ⅶの様になる。

表Ⅶにより、主節の時称形式と依存節の時称形式の関係が示されたが、これをもう少し分類してみよう。⁽¹²⁾

(i) (+, +) の関係にあるもの。

savez-savez avez su-avez su, saviez-saviez

sûtes-saviez sûtes-aivez su, sûtes-sûtes

saurez-saurez auriez su-avez su

sauriez-sachiez, sauriez-sauriez

これらは、相互関係が非常に密接なものという事が出来る。*sûtes-saviez* を例にとれば、主節に現われた *sûtes* の 60.7% が依存節に *saviez* をとり、また、依存節に現われた *saviez* もその 26.4% が主節に *sûtes* を

註(9) 主節 *Zéro* の場合をこの調査では省略した。

註(10), (11) 森本先生は、前者を、*direction*、後者を *dominance* という言葉で表わしておられる。

註(12) 時称形式は15あり、その平均値は 6.6% である。それ故 `その半分 3.3% を $6.6\% \pm 3.3\%$ とし、10%以上を+、3.3~9.9%を neuter、3.2%以下を-とした。

表 VII

Principal subordonné	1	1'	2	2'	3	3'	4	4'	5	5'	6	6'	7	7'	8
	savez	avez su	saviez	aviez su	sûtes	eûtes su	saurez	aurez su	sachiez	ayez su	sussiez	eussiez su	sauriez	aurez su	sachez
1 savez	+	-	n	-	-	-	n	-	-	-	-	-	n	-	-
	+	+	-	n	-	-	+	-	-	-	-	-	+	n	+
1' avez su	+	+	n	-	-	-	n	-	-	-	-	-	n	+	-
	n	+	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	n	+	n
2 saviez	n	n	+	n	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	n	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	+	+	n
2' aviez su	n	-	+	n	+	-	-	-	-	-	-	-	n	-	-
	-	n	n	+	+	-	-	-	-	-	-	-	n	-	n
3 sûtes	-	-	+	n	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	-	-	-	n	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3' eûtes su	-	n	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	n	-	-
	-	-	-	-	n	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4 saurez	+	n	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	n
	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	n
4' aurez su	+	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5 sachiez	+	-	+	-	-	-	n	-	-	-	-	-	+	-	-
	n	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	+	n	+
5' ayez su	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6 sussiez	-	-	+	-	n	-	-	-	-	-	-	-	n	n	-
	-	-	n	-	-	-	-	-	-	-	-	-	n	+	-

Principal suboar donné	1	1'	2	2'	3	3'	4	4'	5	5'	6	6'	7	7'	8
	savez	avez su	saviez	aviez su	sûtes	eûtes su	saurez	aurez su	sachiez	ayez su	sussiez	eussiez su	sauriez	auriez su	sachez
6' eussiez su	-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7 sauriez	+	n	+	n	+	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-
	-	n	-	n	-	-	-	-	-	-	-	-	+	n	n
7' auriez su	+	-	+	-	n	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	n	-
8 sachez	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

各欄の中、上は横から見た場合、下は、縦から見た場合を示している。

立っているという事であって、sûtes は依存節に saviez をとり易く、また saviez は主節に sûtes を立てる率が高いという事を示している。

(ii) (-, -) この関係は存在しないか、また、あっても少ない事を示している。たとえば、savez-sachez, saviez-sachez, sachez は非依存節にしか現われないのでこれらの関係は成立しない。sûtes-savez は存在するが極少である。

(iii) (+, -)

saviez-sûtes, savez-saurez, saviez-sachiez, sûtes-ayez su, etc. saviez-sûtes を例にとれば、sûtes が依存節に現われる時、主節には sûtes について saviez が立つ率が高い事を示している。しかし、この関係は一方通行で、主節に saviez が現われた時、依存節に sûtes が来る率は低い事を示している。

(iv) (+, n)

savez-sachiez, saviez-sussiez, sûtes-eûtes su, etc. (+, +) について生じやすい関係である。主節が savez の時、依存節には savez につい

で、ある条件の下で *sachiez* が現われる率が高く、また一方、依存節が *sachiez* の時、主節には *savez* が立ちやすい事を示している。

4. 次に、依存節を導く *conjonctif* と、その依存節に現われる時称形式の関係を考えてみよう。表Ⅷは *Discours* における、表Ⅸは *Récit* におけるその関係を示したものである。

表 Ⅷ

	1	1'	2	2'	3	3'	4	4'	5	5'	6	6'	7	7'	total
1. que conj.	196	21	38	7			14		62	3	3	16	3		363
2. pronom relatif	166	29	29	5			8	1	4	1		13	3		259
3. si	39	1	25	5			1								71
4. quand	19	13	4		2		5	1					1		45
5. parce que	28	5	5				1						3	2	44
6. comme si			7	1											8
7. dès que	4		1												5
8. puisque	3	2													5
9. pour que				1					2						3
10. si~que	1				1		1								3
11. assez pour que~			1				1								2
12. tant~que	1		1												2
13. pendant que			2												2
14. sans que	1														1
15. pourvu que									1						1

表 Ⅸ

	1	1'	2	2'	3	3'	4	4'	5	5'	6	6'	7	7'	total
1. que conj.	47	4	217	38	3		1		23	2	37	132	5		410
2. pronom relatif	69	6	174	43	25		3		2		4	215	4		347
3. quand	31	9	61	8	37	16	2						10	2	176

4. parce que	16	1	67	9		2	4			2	101
5. si	8	2	51	17						1	79
6. comme si			14	8							22
7. si~que	1		9	1	9						20
8. pendant que	2		14								16
9. lorsque	1		4	1	4	2					12
10. dès que			4			2					6
11. depuis que			3	3							6
12. jusqu'à ce que								2	1	3	6
13. pour que								4		2	6
14. tellement ~que		1	3		1						5
15. tandis que			3								3
16. puisque	1		1								2
17. sans que									2		2
18. quoique									2		2
19. à peine~que					2						2
20. tel que	1		1								2
21. de sorte que			1		1						2
22. tant~que	1				1						2

Discours, Récit 共に que に導かれる依存節が最も多く、次いで pronom relatif が多い。そしてそれらの依存節に現われる時称形式は、Discours では savez, Récit では saviez が第一位を占めている。saviez は、特殊な conjonctif に導かれる依存節を除いて殆んどすべての依存節に現われ特に comme si の後は Discours, Récit の別を問わず saviez, もしくは, aviez su が現われている。jusqu'à ce que, pour que, sans que 等の特殊な conjonctif の後には, sachiez, ayez su, sussiez, eussiez su の中のいづれかが現われるが、これらの時称形式が最もよく現われる

のは、que に導かれる依存節においてである。que に先立つ主節の動詞の種類 (falloir, vouloir, etc) によって, savez-sachiez, saviez-sussiez の相互関係によって, 現われ方が決められてくる。sûtes は, 依存節にあまり現われない時称形式であるが, Discours, Récit 共に quand の後にはよく現われ, 主節の時称形式との関係は saviez-sûtes の場合が多い。êtes su が現われるのも quand の後が多い。si~que の後も sûtes が現われるが, この時, 主節との関係は sûtes-sûtes が多い。parce que, pendant que の後は savez または saviez が多く現われている。

5. 今まで調べてきた事から, 非依存節・依存節への時称形式の現われ方をまとめてみると次の様になる。○は現われるもの, △は条件によって現われるもの, ×は現われぬものとする。

表 X

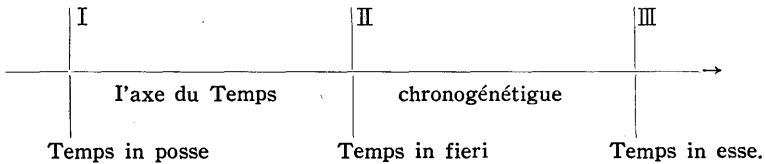
	1. savez	2. saviez	3. sûtes	4. saurez	5. sachiez	6. sussiez	7. sauriez	8. sachez
非依存節	○	○	○	○	△	△	○	○
依存節	○	○	○	○	△	△	○	×

表 X は三つのグループに分類される。まず, 非依存節・依存節ともに○のついている第一群, 次に△のついている第二群, 非依存節にのみ○をもつ第三群である。これらは従来の文法にしたがえば, 第一群は indicatif, 第二群は subjonctif, 第三群は impératif である。第一群は, savez, saviez, sûtes, saurez, sauriez の五種の単純形とそれらの複合形により, 十種の時称形式を持つことになる。これらのうち, sauriez は普通 conditionnel として別の mode に属しているが, この様な構造上からの分析によっては, sauriez もまた indicatif の中の一時称形式にすぎなくなり, これを独立した mode に分類しなければならないような理由が見つからない。

6. これまでみて来た十五種の時称形式は, 人間の精神作用とどのような関係にあるのか, つまり, 各時称形式がどのような l' image-temps を (103)

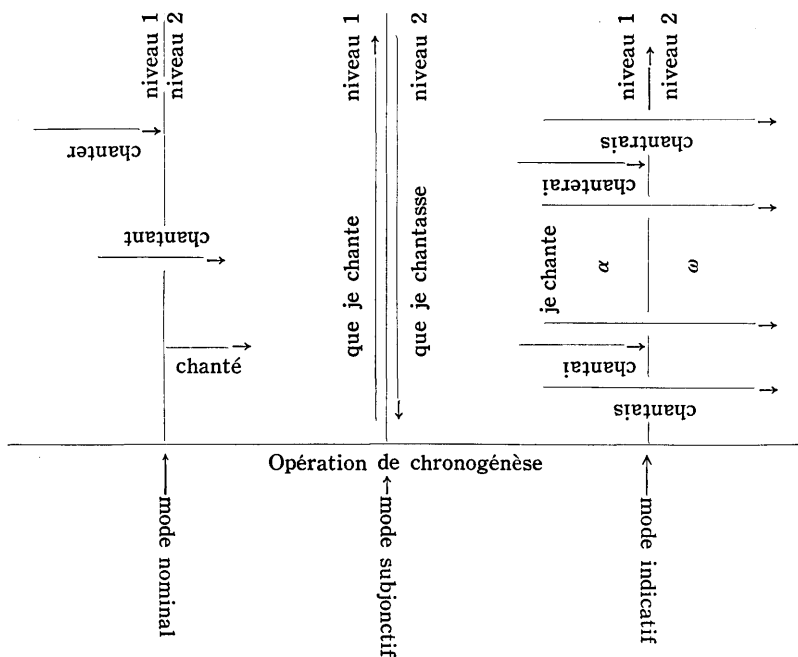
担っているのか、ここに G. Guillaume の考え方を要約することで、このレポートの結論にかえたい。

我々の精神がその内部に image を形成するとき、ある時間がかかり、その実在する時間は一本の直線で示される軸を形成する。この軸はある時間の持続を示し、時間に関する精神的表象のすべてが生じる軸である。Guillaume はこの軸を l'axe du temps chronogénétique と呼び、この軸上に展開されて行く思考作用を chronoégnèse と名づけている。更に、この軸にまじわる三本の縦軸を Guillaume は考える。 temps in posse, temps in fieri, temps in esse の三本である。人間の思考は、まず、この横軸の上で展開され、次に三本の縦軸のいずれかで現実に現わされる。



今まで見て来た種々の時称形式は、これらの縦軸の上に現われる事になるが、まず、I 軸は時間が言葉の image の中に内在している段階である。それ故、この軸上に現われるものは、動詞の infinitif, participe である。II の軸で現実化される思考作用、それは、第二群の時称形式つまり、mode subjonctif となって現われる。III の軸まで思考作用が到達して現実化される時、それらは第三群の時称形式、即ち、indicatif となって現われる。Guillaume は、この思考作用と時称形式との関係を次のような図式にまとめている。

(13)
 軸 I では、思考作用は非常に早期に遮断されてしまったので、思考は殆んど動いておらず、必然的に時称の成立はない。この軸では、時は広範な現在として思考上に呈示され、ただ procès の表現の際にわずかにその中に含まれる時を表現する事が可能なのである。つまり、(i) procès の成就がまだなされておらず思考がその展開のすべてを目撃し得るとき、niveau 1 において infinitif として現われる。(ii) procès の展開がす



になされており、思考がその完成された部分にのみ定着して行こうとするとき、思考は未完の部分を見込んでいる。この時は、niveau 1～2において *participe présent* となって現われる。(iii) 展開が完了してしまったとき、niveau 2 において *participe passé* となって現われる。

軸Ⅱにおいては、思考作用は未完のまま、現実化されてしまうので、思考は無限の時の流れの中であってその *procès* を帰すべき確固とした基準を持たない。ただ、思考は時に関して上昇と下降の二つの方向を持つのみである。思考する主体が、ある事態の出現に応じて自分の行為を、また、自分の宇宙を、現実化していこうとするとき、時は未だ現実化されていない時の方向へ上昇しようとする。つまり、*que je chante*, *que vous sachiez*, となって現われるのである。一方、思考する主体が、自分を含めて、そこに生じた事柄一切を担いながら、もはやそうでないものの方向へ逃れよ

うとするとき、時は下降方向に向い、 *que je chantasse, que vous sachiez* となって現われる。

軸Ⅲでは、*indicatif* となって現われるが、この軸上で時は三つの *époques* に分けて表わされる。即ち、*passé, présent, futur* の三つであるが、*présent* を中心に上昇するものが *futur*、下降するものが *passé* である。*je chante, savez* で示されるこの *présent* は、論理的な時の *présent* とは一致しない。論理的な時の *présent* は、長さを持たない数学的な点であって、直線を *passé* と *futur* とに二分するものである。*je chante, savez* で示される *présent* は、すでに実在した時 ω と未だ実在しない時 α の両方を併せ持つ時である。そして、この潜在的な性格を示す α 、実在的な性格を示す ω の存在は、言語上の時を考える上に大きな役割を果す。軸Ⅲにおいて、 α の性格を示すもの、即ち、実現の可能性はあるが未だ実際には実在していないという性格を示すものは *niveau 1* に現われ、 ω の性格を示すもの、つまり、実在したという現実性を示すものは *niveau 2* に現われる。*passé* の領域で *niveau 1, niveau 2* の両方にわたって照合する時称形式は、*chantais, saviez* であり、*niveau 1* にのみ照合するものは *chantai, sâtes* である。*niveau 1, niveau 2* にわたるといふ事は、未完の部分の実現の可能性を見込みながら、実在したという現実性を示して行く事であり、これはそのまま、*chantais, saviez* の性格となっている。*saviez* が α と ω の併存によって現実化される *savez* とアスペクトとして同質のものを示す理由もここに見出される。*niveau 1* に現実化される *chantai, sâtes* に関する *Guillaume* の考え方は特殊である。“*Pierre marcha*”, このとき *marcher* という行為が始まり、進行していったのはわかるが、その行為が終った事はわからない。*niveau 1* においては、行為は完了の可能性はあるが永遠に未完である。そこで我々は一種の無意識の推断により完成したという印象を作り上げようと狙う。そのとき、現実化される時称形式が *sâtes* であり、それ故、この時称形式は一種の錯覚を閉じ込めている。*Guillaume* はこの様に説明しているが、この考え方は余りにも独創的で納得しにくい。この部分に関しては、*A Klum* の主張の

方が納得しやすいが、それはまた、別の機会にゆずりたい。

⁽¹⁴⁾
次に、futur の領域において、niveau 1 に現われるものは、chanterai, saurez であり、niveau 1, niveau 2, にわたるものは、chanterais, sauriez である。まず、niveau 1 にある saurez は、“実現の可能性がありながら未だ実在していない時。”という事である。sauriez については、niveau 1, niveau 2, の両性格が併存するので次のようになる。

“実現の可能性はあるが未だ実在しない時を見込みながら、すでに実在したという現実性を示す時”という事になる。一体これは、具体的にどういう事を示すのだろうか。これには二つの場合が考えられる。一つは、「過去からみた未来」であり、もう一つは、「現在の事実を反した仮説」である。このように考えるとき、sauriez を indicatif の一時称形式と見なしにくい理由は何ら見つからなくなる。また、saviez が「過去からみた未来」を現わす事がある理由も、ここからうなずけて来る。今までの構造的分析において、saviez が各分野に示した柔軟性も saviez のこのような性格に由来しているものなのである。

註 (13) G. Guillaume : Langage et Science du Langage. Paris, 1964 “Epoques et niveaux temporels” p. 269.

註 (14) A. Klum : *Verbe et Adverbe*. Stockholm 1961, La position structurale du passé simple (p.82~p.85)